平成 25 年 7 月号　№441

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

六十数歳の夫から妻へのﾗﾌﾞﾚﾀｰ　及川　栄喜
「齢」八十を迎えて想うこと --　中村　一郎
備えあれば憂い無し ----------　塚原　謙二
笑いとボランティア ----------　森　富士雄

父のこと

大蔵康次

私の父は昭和34年6月20日夕方、自宅で倒れ、24時間足らずで亡くなってしまった。私が20歳の時である。

倒れた日の朝、口論をしてそのまま学校へ出掛けた。喧嘩の原因については全く覚えていない。帰路、友人と駅で別れる際に何となく離れ難く懸命に友を引き止めていた。家に着いた時には、父はすでに意識はなく明け方に息を引きとった。忘れる事のできない苦い思い出である。

昨年、母の13回忌の法要と併せて、父の50回忌を行った今では父を知る人も少なく、明るく外交的な母と較べて、あまり印象には残っていなかったようだ。

父の記憶は四、五歳頃からだろうか。親類の集まりがあると、皆の話をいつもニコニコしながら聞いているだけで一人で静かに酒を飲んでいた。私は子供心にもっと周りの人達と話をすれば良いのにと思ったりした。又二人だけで、浅草の遊園地、両国の国技館へ相撲を見に行った事もあった。

鮮烈な思い出は、終戦後、復員して来た時の事だ。玄関に顔中ヒゲの伸びた父が突然現れた。私はすぐに父だと判った。親類の家に居た母へ全速力で伝えに走った。その時の嬉しさと感動は忘れられない。土産に真っ赤なリンゴを父から渡された事。それから、幾日も寝ていた父の寝顔を何回もそっと覗いていた。

映画でよく見る出征時の勇ましい見送りはなかったように思う。父は中国の北支へ行ったが北支の何処なのか聞いていない。母も戦地の様子については何も聞いていなかったようだ。多分、話したくもないという事だったのだろう。亡くなってから残念に思う事は酒を酌み交わしながら、二人でしみじみ話をする事がなかった事である。

日中・日米の戦争では数百万人の日本人が亡くなった。大人しいと思っていた父でも厳しい戦地で闘い、生き残り家に帰って来れた事は、運のよい人だったと思う。

我が家には父が使っていた古めかしい洋服ダンスがあり、私が現在使用している。父が結婚した時に購入した代物である。材質はよく判らないがやたらと重く大人二人でも持てない為、本来は二階で使いたかったが上にも運べずそのまま使用している。使い勝手も悪く、引っ越しの度に処分候補になっていたが、都度、思い留まり、今になると父の残した唯一の記念品と思って大事に使っている。転勤族の長男にも因果を含めて引き継ごう。

（編集委員）

六十数歳の夫から妻へのラブレター

異変は突然襲って来た。前夜来耳鳴りが続いていたが朝起きてみると右の耳が聴こえなくなっていた。四十数年間勤めた会社を心ならずも明日で退任・退社するという日の出来事だ。

早速、地元の大学病院に飛び込んでみると「突発性難聴症です。耳を治したいのなら即刻入院して下さい」との宣告。この病は、老若男女を問わず突然発症するという。

日に2回の点滴を受けながら只管安静にしているだけの治療だから1日がとにかく長い。これからの事を考えると夜も眠れぬ日々を送っている私の処に、運転の出来ない君は毎日片道40分の道を歩いて通ってくれた。

私が病院食を食べている側でコンビニの弁当を食べている　私がソファーで本を読んで居ると君は私のベッドでぐっすり寝ている　これからの事を考えると君も眠れないんだろうなあ～と寝顔を見つめる　仕事にかまけて家庭をほとんど振り向かなかった私は色んな話が君と出来た　千千に心を乱されていた私は君との会話と笑顔でどんなにか心を癒された事か　口に出して素直に言葉で言えない私は君の寝顔に向かって「有難う」と呟く

面会時間ギリギリまでいて暗くなった夜道を帰ってゆく君を私は病院の出口まで送っていく

1週間ほど過ぎて僅かながら聴力が回復して来た事が嬉しくホッとする。長年のサラリーマン生活に終止符を打つ一つの区切りが突然の病と入院で付けられたが、君との新たな生活への出発点にもなったのだ。

…あの日から10年経ちました…

（井野　及川　栄喜）

「齢」八十を迎えて想うこと

昭和八年生まれの私は今年「齢」八十を迎えた。よく頑張ってきた…という気持ちと、年は取りたくない…という気分が交錯する。それぞれの節目節目の出来事は今でも鮮烈に記憶しており、世に厚顔無恥という言葉があるがそれを承知で小さな小さな自分史を綴ってみたい。

20代、肺結核を患い闘病生活を余儀なくされ、現在のような特効薬はなく、大気・安静・栄養療法を守り、美空ひばりの「リンゴ追分」をラジオで聞き、早く社会復帰したい一念で悶々とベッドで過ごしていた。

30代、毎日の仕事のなかで多くの矛盾を感じ、労働組合運動に明け暮れる。三池・安保闘争、新島基地反対闘争、砂川闘争に参加する。

40代、過激な組合運動を反省し、社の生産性・能率向上運動に精進する。組合運動の仲間から裏切り者呼ばわりされたが、お客様あっての会社、会社あっての社員である…と説得を試みる。

50代、社の方針に不満が募るが辛抱し、一念発起して幹部登用試験に挑戦する。

60代、運を得て、幹部に登用されたが、夫婦で前後して、癌手術を受ける羽目になり、闘病の甲斐なく妻に逝かれる悲運極みのなかで定年を迎えた。

70代、菩提寺の僧侶の訓えから、妻（位牌）とともに寺社をめぐり、人は「生きている」のではなくて「生かされている」ことに気づかされる。

80代、一年生である。幸せで静かな毎日にしたいと念じている昨今である。青春のころ、父親から「人生は山あり谷ありだ」谷であっても挫けるな…と諭されたことが甦り熱いものが込み上げてくる。

（西志津　中村　一郎）

備えあれば憂い無し

防空頭巾を被った町民が集まると、町会長が「空襲」と叫んで石油缶を棒でガンガン叩く。隣組長がメガホンで「小林さん宅に焼夷弾落下。水のバケツリレー開始」と大声で怒鳴る。

各世帯に設置を義務付けられている防火水槽から水を汲み上げ列を作ってバケツを手渡すが、最後の人に渡る水はバケツの底に少し。長い竹竿の先端に縄の束を括り付けてある防火ハタキをちょっぴり水に濡らし、小林さんの屋根瓦を数回叩く恰好をする。すると、「佐藤さんの庭に黄燐焼夷弾落下」と再び隣組長。これまた各世帯に常備が義務づけられている砂袋を両手にぶら下げて駆けつけ、黄燐焼夷弾落下地点とされる箇所に砂袋を投げつけ、その上にシャベルで土をかぶせる。防火訓練終了後、指導監督に来ていた陸軍中尉からお褒めの講評があり、備えあれば憂いなしと激励される。

わが町が重爆撃機の大編隊による実際の焼夷弾攻撃を受けたときの恐怖は、今でも鮮明に頭に残っている。火がついている数万個の焼夷弾が夜空を真昼のように変え、火の雨となって頭上から降ってきた。命からがら逃げまわるよりなかった。

東京大空襲の記憶も忘れることは無い。栃木県内に居た私からも東京方面の地平線が夜空に真っ赤に染まっていた。今にして思えば、その時東京では老若無数の人たちが煉獄の炎の中で焼け死んでいたのだ。

備えるべきは敵ではなく、自国の誤った指導者だと分かった時は犠牲者の魂はこの世の境を越えていたのだ。

（大蛇町　塚原　謙二）

笑いとボランティア

若い頃の話だが、入社して営業を担当することになった。その時代は、営業担当者はほとんど煙草を吸ってお客様と会話の「間」をとっていた。自分は喫煙をしなかったのでお客様と接する時、なかなか「間」がとれずに悩んでいた。

ある日、友達から「落語を聴きに行かないか」と誘われた。以前から演芸に興味をもっていたので迷わず即答。

新宿末廣亭へと出向いて落語を聴いている時「ふと」想った。「間」のとり方は「落語に有り」と。

その後、雑誌の「落語愛好会・会員募集」を見て早速入会する。先輩から「人の輪は話し上手に聴き上手」と手ほどきを受け徐々に「間」がとれるようになった。

私の兄が新宿淀橋中学特殊学級の教員だった頃、ソフトボールの審判を頼まれた。子供達と会うのに少し不安はあったが、そこは落語で身に付けた笑いの極意を発揮、すぐに溶け込むことが出来た。

これを機にボランティア活動に拍車が掛かる。兄の紹介で心身障害児支援団体「東京都青年文化協会」に入会。春は運動会、秋はバスハイク、冬はクリスマスの集いなどの支援活動を行って来たが、常に心がけていたことがある。それは児童と会話をする時は児童の目の高さで目を見て話す。そしてユーモアのある話題にすることだった。

「ボランティアは同情じゃなく愛情をもって」の言葉を糧に活動をしてきたが、今だに落語愛好会で培った癖が抜けず、印旛沼ネットワーカーの会や市民カレッジで、話題が途中で脇道に入り、話に「落ち」を付けて混迷を極めている昨今である。

（千成　森　富士雄）

７月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

URL　http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

先日突然、高校時代の友人から大学のゼミ仲間の葬儀に参列するので、山口より上京すると電話がかかってきた。聞けば、斎場は臼井駅周辺だと言う。知らん振りもできないので、自宅に泊めてやることにした。

翌日葬儀が始まるまでの時間を利用して、佐倉の観光スポットを車で案内した。市立美術館、佐倉城址、順天堂記念館、佐倉高記念館等、いずれも案内されたことはあっても、ガイド役を務めるのは初めて。それでもなんとかいい加減な蘊蓄を披露して喜ばれた。

点在するこれらの施設の見学は、車を利用するのが早くて便利であった。しかし遠くＪＲや京成でやって来た旅行者にとって、足の確保は難題である。すでに導入されている循環バスの拡充とＰＲが、佐倉の観光振興の第一歩であろう。

（田村　孝則）

あとがき

本紙を読んで、４人の筆者の夫々の人生に込められている味わい深い思いに、心をうたれ共感を覚えました。特に「備えあれば憂い無し」の文章は現時点の世相に対する極めて重い警句が込められていると思います。

平常時は無論、天災時や戦争等の異常時においても、「人権は国権より絶対的に尊し」という理念を失ってはなりません。但し、異常時には、国権を優先せざるを得ない場合が有ると思います。そんな場合は、世が平常に戻った時点で、人権が過剰に侵害されたか否かを、国民全体が真剣に反省して、その結果を正しく記録し、後世に残すことがこれも絶対的に必須です。さも無くば、この文章で指摘されている備えるべき対象を間違える事に成り、取り返しのつかない世代となってしまいます。

（服部　一宏）